

日本古代史 正解

大平裕著 (講談社・1680円)

史学研究の現状に憤怒する



評・渡辺利夫

(拓殖大学学長)

歴史についての判断を求められたときに、政治家やジャーナリストの用いる常套句に「それは歴史学者による検証に委まかされるべきだ」といったものがある。歴史学者にして初めて客観的な歴史の解説が可能になるといいたいのだろうが、私からみれば歴史学者ほど歴史を恣意的に扱いうる立場の人間もほかにいない。時代の思潮におもねってであらう、史実を特定 of イデオロギーに引き寄せ、自分(自派)に都合のいいように紡ぎ上げたものが、戦後日本に一般的な近現代史である。困ったことに中学や高校の歴史教科書までがそういう線に沿って編まれている。現在の価値観によって過去を裁くというのであれば、これはもう歴史学などではない。それぞれの時代に分け入り、それぞれの時代に与えられていた諸条件の中で、日本と日本人がどう

立ち居振る舞ったかを記述する営為が歴史学なのである。古代史ともなれば、これがきわだって専門的な領域であるがゆえに、専門家の恣意の幅は一段と大きい。本書は、津田左右吉という権威による古事記・日本書紀批判を源流とし、戦後60年余にわたり語り継がれてきた日本の古代史を、その根本において否定し、新しい古代史を構築しようという著者の膨大な研究のエッセンスである。

古事記・日本書紀を文献学的な考証によって唯の神話に過ぎないと切り捨てるだけで、古代史の構築自体にはまるで関心を示さない日本の歴史学者とは何者か。残されたのは、弥生時代だの古墳時代だのという無味乾燥な遺跡の時代名だけである。そこには、往時の緊迫した極東アジアにあって屹然と独立を保持し、国造りに営々の努力を重ねる、血の通った人間が存在していない。日本の古代に生きて在った指導者の名譽回復を図り、そのことを通じて古代国家の成り立ちを解き明かそうという著者の並々ならぬ思いが読む者の胸に迫る。日本の古代史学の現状に対する著者の憤怒が筆に籠こめる。卑弥呼が天照大神であり、日向三代が確かに存在したことを証す精細な考証力にも刮目すべきものがある。